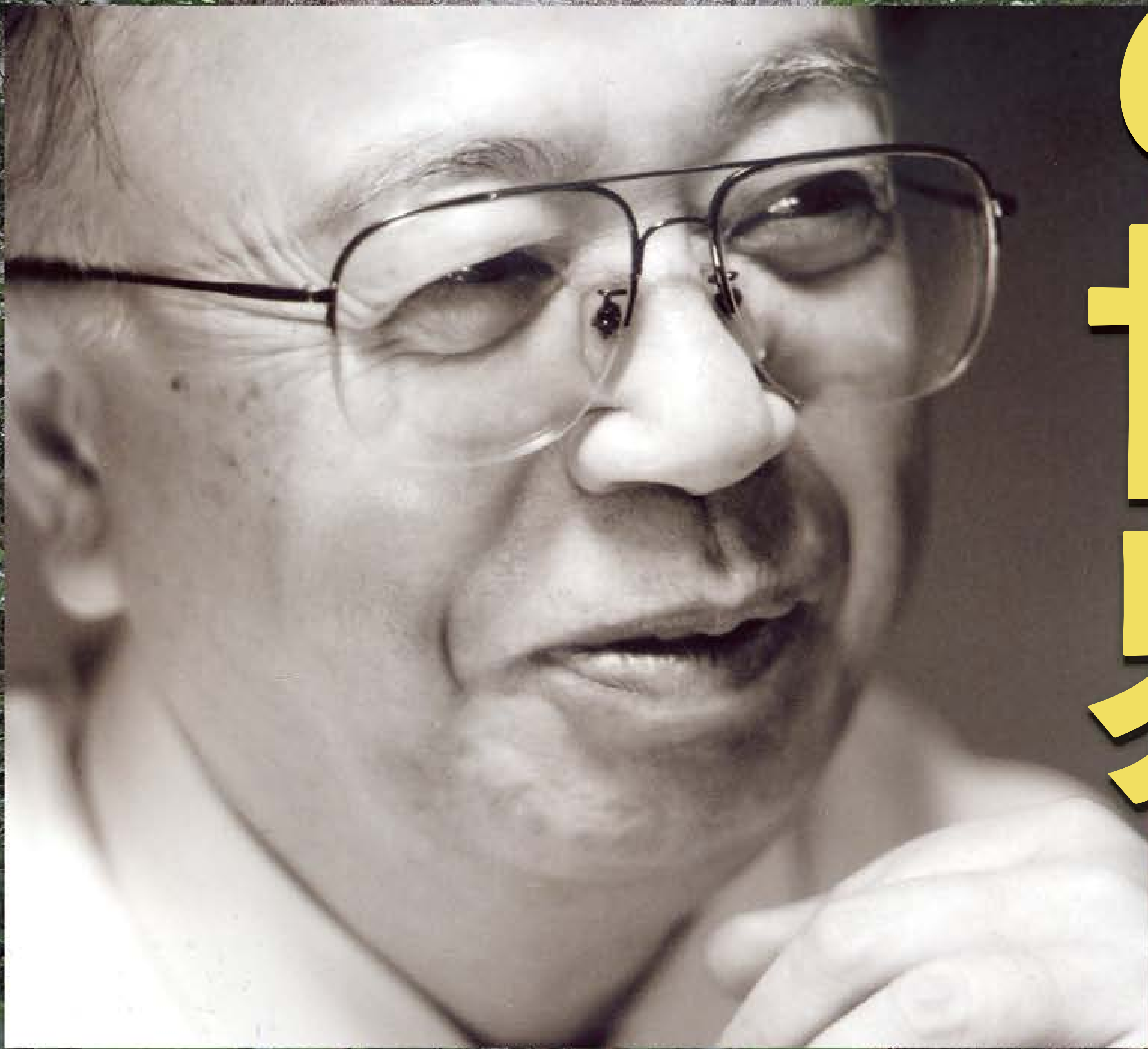


特別企画展

植物学者
河野昭一
その生涯と只見

の世界



企画展にあたって

—ただみ・ブナと川のミュージアム初代館長の軌跡

2016年10月14日、植物学者河野昭一氏が亡くなった。享年82歳であった。河野は、まぎれもなく著名な植物学者であり、教育者であり、自然保護運動の活動家であった。植物の生きざま（生活史）を克明に観察記録し、その諸量を統計学的に解析し、集団としての種とその適応、進化を考察する手法は、戦後の日本の植物学、植物分類学、植物生態学に新たな地平を築いた。富山大学、京都大学においては多くの研究者を育て上げた。こうした研究教育活動のかたわら、日本の自然環境や野生生物を保護・保全する活動に邁進するなど、その学問的、社会的貢献度は極めて高い。

河野は、ここ只見町に大きな足跡を残している。河野は只見町史編さん事業の一環として行われた「ブナ天然林総合学術調査」を指導し、その成果のなかから只見町のブナ林に代表される自然環境の価値を科学的に裏付け、伐採中止に追い込むとともに、「奥会津森林生態系保護地域」の設定やその後の世界自然遺産の登録運動にも尽力された。そして、只見町ブナセンターの設立や「ただみ・ブナと川のミュージアム」の開設を提案、その実現に尽力された。今日の只見町におけるブナを核とした町づくりや只見町ブナセンターの活動の基礎をつくることに果たした役割は極めて大きい。

本企画展は、植物学者河野の経歴を追い、その研究者、教育者そして自然保護運動の活動家としての河野の業績を紹介し、只見町における活動と業績を顕彰するものである。



3年にわたり取り組まれたブナ林総合学術調査
(2002年、黒谷川流域)



自然観察会「河野昭一先生と歩くブナの天然林」において
(2012年、叶津川木ノ根沢)

生い立ちと少年時代

河野昭一は、1936年に北海道室蘭市本輪西町で電気工事会社に配電工として勤める父・福一、母・初代の長男として生まれる。祖父は兵庫県淡路島出身の開拓民であり、後に農業のかたわら馬喰（馬の仲買人）、牧場経営をしていたという。河野昭一本人が、河野水軍、海賊の末裔を自認していたのはこうした背景がある。昭一4歳の折、一家を不幸が襲う。父・福一が高圧電線での工事作業中、感電事故にあい、大怪我をする。さらに妊娠中の母・初代が流産、以後両親とも病気がちとなり、生活は楽ではなかったようだ。

河野が育った本輪西町地区は、今でこそ市街化されているが、室蘭の中心地から離れ、当時は森林と畑地が広がる片田舎であった。小さい頃は電気もないランプ生活だった。また、戦争中は、祖父母の牧場に疎開していたこともあり、オオバナノエンレイソウやミズバショウ、シラネアオイを当たり前に見る自然が身近にあった。そうした環境の下で育つなか、中学校時代では最初に昆虫採取に熱中し、その後、理科教師の影響で植物に強い関心を持ち、植物採取に明け暮れることになる。父・福一は、新聞紙を挟んだ板に石を乗せ、押し葉を作る昭一の姿に「おかしい、昭一は廊下に石を並べ始めた」と心配し、やめさせようとしたが、母・初代は昭一をかばったという。



母・初代に抱かれる昭一



室蘭栄高校入学時の昭一

室蘭高校時代

—生物部で植物採取に明け暮れる

戦後の混乱期ではあったが、自由な校風であった地元の室蘭栄高校に入学した河野昭一は、早速、猛烈な生物好きが集まっていた生物クラブに入部、教員の指導もないまま、農耕地化や宅地開発で消失しつつあった学校近くの鷺別湿原（登別市）で植物採取に奔走し、植物目録の作成にも取り組んでいる。

大きな転機は、高校1年の夏にオロフレ山（しろおいちょう そうべつちょう白老町と壮瞥町にまたがる標高1230.8mの火山）で行われた採取合宿である。オロフレ峠でチングルマ、イワウメ、ミヤマダイコンソウ、ヨツバシオガマとの出会いは鮮烈で、標本を作製しながら、一生植物と暮らそうと決心する。また、山麓に祖父母の牧場があった鷺別岳（室蘭岳）をフィールドに採取調査を行い、この地域では未記載のウスユキソウ、エゾコウボウ、フギレキスミレなどを発見している。

その後、大雪山系の縦走に始まり、天塩のヌプロマッポロの蛇紋岩地帯、礼文島、利尻島、夕張岳、芦別岳、日高のアポイ岳など手当たり次第に歩き回るなかで、やがて高地・極地のフロラ（植物相）に興味を持っていった。



室蘭栄高校生物クラブ(文化祭において、中列中央)



オロフレ山植物採取行(1951年)



鷺別泥炭地での植物調査(右から二人目、1953年)



山頂で友人とふざけあう昭一(左)

北海道大学農学部時代—館脇操教授門下で

一浪をして北海道大学農学部に入學する。高校時代より顔見知りの『北樺太の植物』、『北海道の植物』、『日本森林植生図譜』などを著した植物分類地理学、森林生態学の高名な研究者である館脇操教授の農業生物学教室に入り、師事する。同じ教室には、小島覚（後に富山大学、東京女子大学教授）、伊藤浩司（後に北海道大学教授）、辻井達一（後に北海道大学附属植物園園長）らがいた。

当初は、高校時代の生物クラブの延長で、道内各地の高山帯、蛇紋岩地帯を中心に植物相の調査を精力的に行う一方、高校時代の胆振地方^{いぶり}の植生誌を論文としてまとめ、発表する。河野昭一最初の論文である。これに引き続き、道内各地のフロラを調査して歩くなかで発見した新たな植物種の記載や地域のフロラなどを次々と論文として発表している。

こうしたなかで、河野は、従来の形態分類に重きを置く分類学やフロラの研究に飽き足らず、次第に植物種の集団（個体群）の構造や地理的変異に学問的興味を移していく。特に北半球の周北極地域に共通して分布する系統群の多様な形態変異について関心を持ち、後のカナダ留学の動機の一つになっていったものと思われる。当時、館脇教授が作成に取り組んでいた『日本森林植生図譜』の調査を手伝う一方、釧路近くの大楽毛^{おたのしけ}でエゾキスゲとエゾゼンテイカ集団の花の形態変異を精力的に調査し、後に両種の浸透性交雑の過程を論文発表している。



北海道大学農学部農学研究科の館脇操教授の研究室



尾瀬燧ヶ岳山頂にて



アポイ岳山頂小屋で



北見国武華山採取行(1956年)